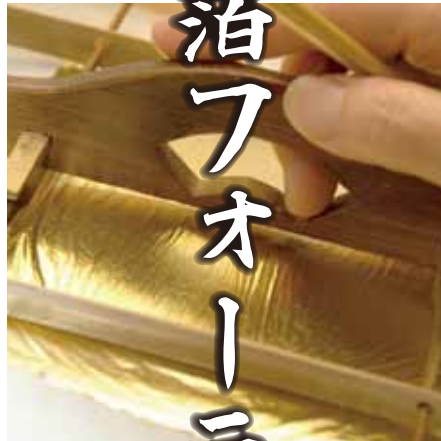


きんぱく



金箔フォーラムレポート

昨年、石川県で開催された次世代へものづくりを伝える21世紀鷹峯フォーラム。その連携事業として金箔技術振興研究所は、10月20日から11月26日まで金沢市立安江金箔工芸館の1階多目的展示ホールで、龍谷大学に委託している研究の成果報告展示会を行った。

11月20日には「文化財保存と金箔産業」と題した金箔フォーラムも開催し、一般の方を多数含む75名が参加した。きんぱく18号では、そのレポートと金沢の金箔産業の未来展望を特集する。



金箔フォーラム

よいものづくりを 次世代に伝えるイベント

2017年10月6日から11月26日にかけて、石川県内各地を会場に「21世紀鷹峯フォーラム・百万石ものがたり工芸の祭典」が開催された。

鷹峯フォーラムとは、よいものづくりを次世代につないでいくという趣旨に賛同した各機関が、それぞれの視点で多彩な事業・イベントを展開するもの。2015年の第1回は京都で、2016年の第2回は東京で行われ、石川県での開催は第3回となる。

この鷹峯フォーラムの連携イベントとして金箔箔技術振興研究所は、委託研究成果報告展示会と「文化財保存と金箔産業」と題した金箔フォーラムを開催。

展示会では、文化財保存・修復分野の権威で龍谷大学の北野信彦教授に委託した「文化財建造物に使用された金箔に関する保存修復科学的な調査研究」の中から日光東照宮をモデルケースとして取り上げ、金箔の箔技術が文化財建造物の塗装彩色修理に役立っている点を公開した。

金箔フォーラムでは、北野教授による基調講演「文化財建造物の塗装彩色修理に使用する金箔の歴史」、金沢学院大学副



学長の山崎達文教授の特別講演「金箔製造技術を支える素材-澄打紙の原材料とその製紙」に続いて、北野教授、山崎教授に日光社寺文化財保存会で漆塗の技術管理を担う佐藤則武氏を加えパネルディスカッションを行った。パネルディスカッションのテーマは「文化財保存と金箔産業」。文化財の保存・修復を支える産業としての金箔について、意見を交換していただいた。

パネルディスカッション

継承のリミットを迎えつつある 伝統産業を危惧

文化財の保存・修復においては、既存の部材を可能な限り再利用したり、伝統的な技法を踏襲するという日本の独特な基本理念がある。加えて近年は、できるだけ国産の素材を使うようにという動きがある。

これについては、北野教授がこう話している。「以前、私が東京文化財研究所に在籍していた時の話で、ある文化財建造物の塗装修理に国産漆を使おうとしたときのことだが、仕事はある、予算もあるという中、肝心の国産漆が入手できなかったことがあった。そのときに感じたのが、使用量が同じだとしても、毎年、少しずつでも使い続けるのと、10年に一度だけ大量に必要なものでは産業としての存続のためには大きな違いが出てしまうということ」。

北野教授の発言を受けて、日光東照宮の修理に国産の漆を使ってきた日光社寺文化財保存会の佐藤氏は「長年、我々は国産漆を使い続けてきたのだが、13年ほど前に国産漆の実態調査をしたときには『漆が売れずに余っている』という話を聞いた。国産漆の生産量を伸ばすために木を植えてたとしても、継続した需要がなければ漆掻きの職人がいなくなってしまう。漆塗の職人を育てても同様に、刷毛などの道具を作る職人がいなければ仕事をするのができなくなってしまう。結果として業界が衰退してしまう」と続けた。

同様のことは金箔業界にも言える。需要が減ることで職人も減ってきている。このままでは技術の伝承ができなくな

■フォーラム・パネルディスカッション講演者



龍谷大学 文学部 教授
北野 信彦氏



金沢学院大学 副学長
山崎 達文氏



日光社寺文化財保存会
漆塗技術管理
佐藤 則武氏



ってしまう。

これについては山崎教授が「縁付箔を作るために不可欠な箔打紙の元となる和紙を漉いているのは全国でも4軒しかなく、現在、石川県内では作られていない。ただ技術そのものは失われてはいないため再開することは可能だという。それでも職人の高齢化などで後継者の育成が困難になっているのも事実。まさにリミットを迎えつつある技術といえる」と危惧している。

国産箔の魅力を客観的に証明することが必要

後半では、産業としての金箔について、各氏に意見を聞いた。

北野教授は「使用する立場からみると、基本的に品質さえしっかりしていれば国産でも外国産でも問題はない。なら違いはどこにあるのかといえば、一番は信頼性。誰が、どうやって作ったかが分かっている安心感は大きい。今後はこれを科学的、客観的に証明していくことも重要になっていくだろう。加えて、日本に長く伝えられてきた文化財を守るため、日

本に代々伝えられてきた技術や素材を使うことの意義を次世代にも伝承していかなければならない」と語る。

山崎教授は「伝統産業は生態系と似ている。生物が進化するように新しい技術が生まれる。金箔でいえば縁付の生産性を補うように断切が生まれたが、ならば将来的には断切さえあればいいのかといえばそうではない。進化の元となった存在がなくなってしまうと、新しいものも存続できなくなる。利便性だけを追うのではなく、両輪で考えないといけない」と意見を述べた。

佐藤氏は、技術者の立場から「産業を支えるのは職人。産業として伝統の技術を守り伝えるため、私たち職人は次の世代を育てる義務があると感じている。そのためには業界全体の未来を見据える必要があり、大学や研究機関などとの協力もしていきたい」と未来を語った。

その他、来場者との質疑応答も活発に行われ、金箔フォーラムは盛会のうちに終了した。



次世代に伝えるものづくり

これからの金箔産業と金沢箔技術振興研究所の役割

産業としての金箔業界は危機的な状況にあるといえる。古くから美術工芸品の装飾に使われていた他、かつて金箔業界を支えていた大きな需要のひとつが仏壇だ。真宗王国として知られる石川県は、各家の仏壇が大きく、金箔もふんだんに使ったきらびやかなものが多かった。



金沢箔技術振興研究所
所長 川上 明孝

断切箔は、その需要がピークだった時代に、革新的な技術として生まれたもので、これによって金箔の生産を飛躍的に伸ばした。それが、ライフスタイルの変化や外国産金箔などの影響で国産金箔の需要が減ってしまった。

国産金箔の新たな使い道として、化粧品や食品など、これまでになかった分野に進出するなどして金箔製造に携わる各社が用途開発を行っているものの、現状ではかつての生産量をまかなうほどの決定打には至っていない。

現在、金沢で作っている金箔の種類は2つ。ひとつは

伝統的な製造方法の縁付箔、もうひとつは戦後の技術革新で生まれた断切箔。全体の製造割合は縁付箔が20%、断切箔が80%となっている。

縁付箔は今後、文化財修復分野である程度の継続した需要が見込めている。文化財修復のすべてが国産縁付箔を使うわけではないものの、日光社寺文化財保存会のように伝統的製法のものを中心に使用するところも少なくない。美術工芸品の分野でも縁付箔が使われることが多い。これは、縁付箔が刻んできた伝統や歴史、完成までにかかる手間暇が信頼となり、信頼がブランドとして選ばれているのだといえる。

縁付箔は金沢箔の20%の生産量だから、これだけでは産業として成り立つとは言い難いものの、このブランドは業界全体の看板として断切箔も牽引していく力を持っている。

技術革新から数十年を経て、断切箔の品質は縁付箔と変わらないほど高くなっている。そうなれば、金沢箔の信頼とブランドを背景にした新たな用途開発や販路拡大を業界全体が協力して新たな道を探っていくことが大切であると同時に、研究所としても可能な限りの支援を行いたいと考えている。

金箔先生の知っ得セミナー

ヨーロッパの箔打紙

ヨーロッパの箔打紙は、インドやミャンマーや中国のそれと比べて多様であることが特徴です。すなわち、インドは羊皮、ミャンマーと中国は竹紙でしたが、これに対してヨーロッパでは、獣皮、紙、プラスチックというように複数の素材を用いるのです。

現在使われている打紙はグラシン紙とプラスチックフィルムです。グラシン紙は、化学処理した木材パルプを抄紙した後、さらに加圧・加熱して作られます。表面がなめらかで半透明な紙です。プラスチックフィルムは石油を原料とする合成樹脂の一種、ポリエステルです。透明で柔らかく、表面の平滑度(なめらかさ)はグラシン紙をはるかに凌ぎます。ドイツ、イタリア、フランスでは、グラシン紙を箔打の最初の段階(第1段階と第2段階に分けることもあります)で使い、仕上げにプラスチックフィルムを使います。プラスチックフィルムは、滑りをよくし静電気を防止するために粉(石膏と石鹼を混ぜたもの)を振りかけて使います。

さて、グラシン紙やプラスチックフィルムは20世紀半ばになってから開発され



㊦プラスチックフィルム ㊧グラシン紙

た新しい素材です。それではその前は何を用いていたのかというと、羊皮紙や牛の盲腸などの獣皮です。羊皮紙は箔打の早い段階に、牛の盲腸は仕上げに使うの



牛の盲腸

ですが、高価な羊皮紙は、中世に亜麻や麻の繊維から紙が作られるようになり、さらに近代になって木材パルプを原料とする紙が普及するにつれて、使われなくなっていきます。これに対して牛の盲腸はプラスチックフィルムが開発されるまで仕上げ用として使い続けられました。イタリアの箔職人の中には、餌が化学飼料になってから牛の盲腸が弱くなったからだという人もいます。

ところで、盲腸も亜麻紙も一手間かけてから箔打に供されました。盲腸はキャビアに漬けられました。亜麻紙の調整については、12世紀のドイツ人修道僧のテオフィルスが次のように記しています。「亜麻の繊維からできるギリシャ紙をとり、それを汝は両側から、べんがら顔料で擦れ。そのべんがら顔料は、最も細かく磨かれ、又乾いた黄土から焼成される。そしてそれを海狸か熊か又は野猪の牙で、それが光沢を得て、摩擦によって色が接着するまで、注意深く磨け。その上でこの紙をハサミで四角形に、横も縦も同様に四指の長さで切れ」(『さまざまの技能について』森洋訳、中央公論美術出版)。(所長 川上明孝)

(資料提供: 金沢美術工芸大学美術工芸研究所)

金沢市立安江金箔工芸館のウィンドウディスプレイがさらに充実。華麗で軽やかに動くアクセントが加わって、金箔の持つ魅力と可能性を発信。

金箔技術振興研究所では、金沢市立安江金箔工芸館を活用した金箔振興普及事業の一環として、石川県箔商工業協同組合と共同で平成29年3月に同館1階に、ウィンドウディスプレイ「Gold Leaf」を新設した。平成29年度はその魅力をさらにアップさせ、より多くの市民や観光客に同館を訪れてもらうための取り組みとして、昨年度に引き続き金沢美術工芸大学にデザイン提案を委託。葉型の金箔を貼り付けた薄く透き通る軽い布を、ウィンドウディスプレイの周りに配置し、下からの送風で金色の葉っぱが軽やかに風に舞うイメージがプラスされ、平

成30年3月11日(日)から公開した。話題性のあるウィンドウディスプレイに、動きが加わったことで、人の目を引き付けるアイキャッチャーとしての役割は格段にアップ。石川県箔商工業協同組合の全面協力で製作されたこともあり、多くの人に覚えてもらうことで、金箔の普及・振興に繋

がることを期待している。

展示場所: 金沢市立安江金箔工芸館1階
多目的展示ホール

※見学による展示ホールへの入場は無料ですが、2階展示室への入館は有料となります。

※17:00~22:00はライトアップを行います。



金箔技術振興研究所

News Letter きんぱく

News Letter きんぱく Vol.18

発行日/2018年4月1日

発行/金箔技術振興研究所

〒920-0831 石川県金沢市東山1-3-10

金沢市立安江金箔工芸館3F

tel. 076-225-8941 fax. 076-225-8942

e-mail kanazawa-haku@wind.ocn.ne.jp

金箔技術

検索

ホームページ
http://www.kanazawahaku-giken.jp

